

足一本なくしたら休める

八幡でもつよまる「殺人合理化」

三池では〇中毒患者が、会社が起した事故でありながら、まるで仮病あつかいにされながら放り出されようとしているが、北九州の八幡製鉄の現場でも殺人合理化はつよまっています。これは八幡製鉄の一組合員が報告した現場の実態である。(大牟田地区反戦青年委員会 機関紙「反戦」第十二号より)

軽傷より重傷がはるかに多いとは

八幡製鉄が発する災害報告書を見ると、昨年一年間で死亡が五名、重傷が七十五名、軽傷十二名であり、不思議なことに重傷が軽傷に比べてはるかに多くなっています。表情を調べてみると、ほんのわずかの軽傷が、腫れに腫れを繰り返して、重傷に変わってしまっていることがわかりました。

ある日、組合事務所「Aさん」を呼んで「あれ」と名を呼んで電話がかかってきました。Aさんが出てみると、「自分の名前はいえませんが、いま現場で手と脚に大ケガをして、ムシロを敷いたりヤカーに乗せられて連れて

八幡で公傷休暇をもらうために

八幡には三百人以上の守衛がいます。彼らはガッチリ教育させられ、家に帰ると、あのスマートな社宅(アパート)の管理人に早変わりするのです。地区労の青年部の人たちが「〇患者を守る特別立法制定」の署名を行くと、「署名をカンパは管理人の許可がなければ、私たちの

職務給から能率給へ

八幡では昭和二十七年以降、職務給を導入し、徹底的にしほりつけてきました。ところが、それでもあきらまぬ会社は、いま「能率給」を導入すると申し入れています。能率給とは、「ガマだしかた」で査定され、実際仕事をしない時間を避けられない待機時間として、七〇％しか支払われないというものです。春闘で賃金が上がっても、ボーナスがきまっても、果して自分がいかに頑張ったかを見当がつかないのです。取組による、その日の日の賃金査定ですべてが

集会時間も厳格に

数十年前も生きる人生ならともかく、この短い人生で、俺たちは時間たいて無関心でなかならうか。職場集会、組合会議に、定めた開会時刻に来る人は何人いるだろうか。十分、二十分、三十分待たせたまわらうか。とうとう参加しない人も

「根性ものがたり」(6)

ハラの中を言ってしまう

四山 荒牧一馬さん

係員にかまき していったら、とくに係員の脱得がはげしかった。



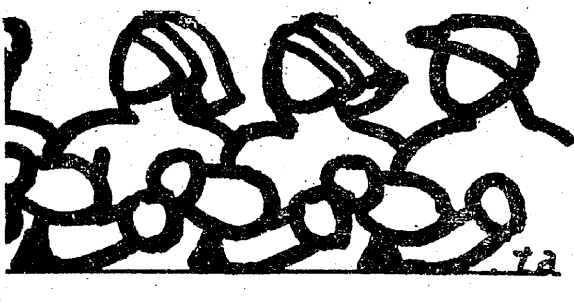
荒牧さんは四山支部、坑内機械工四十九才。奥さん、三人の子供、おぼあちゃん、大島社宅に住んでいる。職場には十四、五人の若い新労働者の中で三人の三本線があるが、それも休んだり鳥流し配役にあつて、一人になることが多い。「三池闘争中もだが、その後病気があがりの身で「ハイスラスト巻」を

金はないけどスカツとする

「思っていることはハッキリ言う。遠慮することはない」というのが、荒牧さんの信条である。現場でも自分のできることはなんでもするが、体力的にもできないものは、はきり断る。これが、荒牧さんが得た三池闘争の教訓だ。

「あのとき三池労組が分裂したとどうも、まだ三池労組の中にも互いにハラの中を出し合って話し合おうというところまで来ていたことが原因だと思えます」

「ワシには第二組合に行く要素はないもろく」



人間のニオイを感じた

山梨大学ワンダーフォーゲル部からの手紙

「三池二十年の闘い」

「三池二十年の闘い」

山梨料理

高棟竜生

「三池二十年の闘い」

「せひ読みたい本」

「せひ読みたい本」

「せひ読みたい本」

「せひ読みたい本」

「せひ読みたい本」

「せひ読みたい本」

機関紙通信が書評

機関紙通信が書評

機関紙通信が書評

機関紙通信が書評

機関紙通信が書評

機関紙通信が書評